

## 「世界のグローバル化と地域のグローバル化」

道ですれ違った外国の人をつい振り返ってしまうことはないだろうか。体格のいい黒人男性みると、“怖い”などと思ってしまうのだろうか。

グローバル化がもてはやされる今日、フィリピン人看護師の大量輸入や外国人児童生徒の問題、小学生の英語必修化など、「外国」がさらに身近に感じられるようになってきている。しかし、国・制度レベルではグローバル化が推し進められているものの、個人の意識や地域社会レベルではどうだろうか。テレビ・新聞・ラジオなどから発信されるそれらの情報を、どこか他人事のように受け取ってはいないだろうか。今年行われた国際学部の新入生と留学生の交流会では、新入生の日本人が留学生が会場に来たとたん、「わー」「かっこいい」と言う声を上げ、まるで有名人だともいうように許可もなく携帯電話で写真を撮り始めたという。この反応にももちろん留学生の彼らは良い気持ちなどしていない。周囲にはまだまだ日本人が多く、実際に外国の人と触れ合う機会が少ないのが日本社会の現状で、そのような現状が他人事感を招き、このような反応にさせるのではないだろうか。これでは外国の人にも心地よく過ごせる共生社会にはならない。

「外国の人と日本の人との間に良い関係を作っていきたい。」そんな思いで平成 22 年から活動をしている NPO 団体「VIP 工房」がある。この団体名は、「Very Important People」の頭文字をとったものであり、ここからは“違いを越えてお互いを尊重し合おう”というメッセージを感じ取ることが出来る。

活動内容は主に 2 つに分けられる。一つはスポーツを通じたものであり、週一回、英語を通してバスケットとサッカーを小学生に教えている。これらは小学校・幼稚園の協力で体育館やグラウンドで行われ、参加費は無料である。もう一つの活動は英語会話教室である。これは、現在小学校で ALT の仕事をしているアメリカ出身の男性が参加者の元へ出向いて行っている。場所は各家であったりカフェであったりと様々である。この英語会話教室の参加者は、幼稚園児から、なんと驚くべきことに 60 代、70 代という年配まで幅広い方がいるという。

「クロス！クロス！」「ワン、トゥー、スリー！」「アイドンノー！」活動の間にはそんな英語が聞こえてくる。今回、活動の一つである小学生のバスケット教室にお邪魔した。子供たちの中には、アメリカ出身の両親を持つ子供たちもいる。しかし、みんな一緒になって楽しそうにバスケットボールを追っている。昨年から参加している女の子は「楽しい」と話してくれた。皆コーチのアメリカ人男性とも親しそうにしており、良い関係を築いていると感じた。

いくらインターネットが普及し、時空を超えて「海外」が近くなったとしても、実際にそれを目の前にした時の感情と言うのはパソコン画面を見ているときとは違う。しかし今日、そんな「海外」の人と同じコミュニティに属することは、誰にでも起こりうることだ。その時お互いが相手を理解すること、又は理解する姿勢を見せることで良い関係を気づくことが出来る。その意識を育てること、それが今の個人には必要なのではないだろうか。